

【論文】

アクティブ・ラーニングでアクティブ・ラーナーは育成できるか

Method of Active Learning to Develop the Active Learners

吉田 あけみ

Akemi Yoshida

キーワード: アクティブ・ラーナー アクティブ・ラーニング 人間関係トレーニング ディベート

要旨; 現在アクティブ・ラーニングの導入が大学教育において盛んだが, もともと必要とされたのは, アクティブ・ラーナーの養成であった。その原点に立ち返り, アクティブ・ラーニングの導入によって, アクティブ・ラーナーは育ちうるのか, 育ちうるならばどのようなアクティブ・ラーニングならばそれが可能なのか。人間関係トレーニングやディベートを題材に, よりアクティブ・ラーナーの養成に効果的なアクティブ・ラーニングを探る。

I はじめに

近年, アクティブ・ラーニング(能動的学修)の推進が, 教育界において重要課題とされている。小学校・中学校・高等学校のみならず, 大学教育においてもFD(ファカルティ・デベロップメント)として研修がなされている。2012年8月の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学～」¹⁾において, この課題が明確にされたことにより, 大学教育においても, アクティブ・ラーニングの推進が強調されている。この答申においては, グローバルな現代社会においては, グローバル人材が必要であり, その育成には大学教育が重要であるということを示したうえで, 大学における学士課程教育の質的転換が必要であり, その道筋として, 以下のようにアクティブ・ラーニングの重要性を主張している。「生涯にわたって学

び続ける力, 主体的に考える力を持った人材は, 学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から, 教員と学生が意思疎通を図りつつ, 一緒になって切磋琢磨し, 相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り, 学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的, 倫理的, 社会的能力を引き出し, それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義, 演習, 実験, 実習や実技等を中心とした授業への転換によって, 学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ, 生涯学び続ける力を修得できるのである。」¹⁾

このように, もともとはアクティブ・ラーナーの育成が重要課題であり, その手段としての

アクティブ・ラーニングであったはずである。しかしながら、現状においては、アクティブ・ラーナーの育成の議論はおきざりにされ、もっぱらアクティブ・ラーニングの方法論等に議論が集中している。例えば2016年9月20日にCinii²⁾で「アクティブ・ラーニング」を検索語にして検索したところ、1625本の論文がヒットした。一方「アクティブ・ラーナー」で検索したところ、ヒット数は25本であった。ちなみにその両方を検索ワードに指定した場合は9本のヒットであった。このことからわかるようにもともとの課題であったアクティブ・ラーナーの育成が隅に追いやられ、もっぱらの興味関心はアクティブ・ラーニングそのものに移っているということであろう。

例えば県立広島大学は平成26年度文部科学省大学教育再生加速プログラム(テーマI)選定事業「生涯学び続ける自律的な学修者(アクティブ・ラーナー)の育成をめざして」が採択され、改革を進めているが、その具体的な実施内容はアクティブ・ラーニングとなっており、アクティブ・ラーナーの育成=アクティブ・ラーニングであるかのように扱われている。

単純な解があるわけではない。現代社会においては、社会にとっても個人にとっても、生涯にわたって学び続ける力は特に必要であろう。さらにそれを誰かから強制されるのではなく、自らが必要と感じ自ら能動的に学ぶ姿勢が求められている。すなわちアクティブ・ラーナーが求められているということはその通りであると思われる。しかし、求められているのはアクティブ・ラーナーであって、アクティブ・ラーニングではない。では今さかんに推進されようとし

ているアクティブ・ラーニングはアクティブ・ラーナーを育てることができるのだろうか。

そこで、本稿において、アクティブ・ラーニングはアクティブ・ラーナーを育てることに寄与しうるのか。寄与する場合にはどのようなアクティブ・ラーニングがどの分野においてどのような条件において有効なのか。どのようなアクティブ・ラーニングの改善があれば、アクティブ・ラーナーの育成に効果的であるのかについて検討していきたい。

II アクティブ・ラーナーとは何か どのように育成するか

アクティブ・ラーナーとは、自ら課題を見つけ、自ら学ぼうとする人であろう。であるならば、まずは自ら課題を見つける力こそが、アクティブ・ラーナーの育成には重要であろう。では自ら課題を見つける力とは何であろうか。物事に対してそれをうのみにすることなく一度懐疑的に見てみるということが必要であろう、しかしまずその前に何事かに興味を持つということがなければ疑問にすら感じないわけであるから、まずは物事に興味を持つということが大事である。興味を持つためには、たくさんの経験をして、たくさんの感動をしてという経験が必要である。そういう意味においては、確かにアクティブ・ラーニングのような学びからいろいろな経験をすることは、アクティブ・ラーナーの育成に寄与するかもしれない。

しかしながら、何かに興味を持つというような体験は、大学時代のそれよりも、幼少時の経験の方がより関係してくると思われる。昨今の

階層研究等においても、親の文化資本の多寡が子どもの育ちに大きく影響することが報告されており、また、それが大学進学にも影響していることが知られている。つまり、大学入学より以前のかなり幼少のころからさまざまな体験をさせ、物事に興味関心を持たせることがアクティブ・ラーナーの育成には重要であるということである。

Ⅲ アクティブ・ラーナー養成に適した教育時期について

近年すでに小学校・中学校・高等学校においてはアクティブ・ラーニングの導入が進んでおり、むしろ大学での導入が遅れているという指摘もある。アクティブ・ラーナーの育成のために、アクティブ・ラーニングが功を奏するのであれば、より早い時期からの導入が必要になってくるであろう。しかしそれは小学校からでいいのだろうか。それ以前の幼少時の経験こそが、アクティブ・ラーナーの育成には重要であり、もしそのためにはアクティブ・ラーニングが必要であるということであるならば、アクティブ・ラーニングの導入も保育園や幼稚園からということになるだろう。幼稚園や保育園は園の方針により、広くアクティブ・ラーニングをとりいれているところもあれば知育偏重の園もあり、また一方で特に教育はせず、もっぱら保育に徹している園もある。が、いずれにしても何等かの保育や教育を受け、さまざまな体験を日々しているわけであるから、家庭環境にも大きく影響されるが、家庭内にとどまっているだ

けよりは、通園していた方が経験値は高まるといえるだろう。

以前は、三歳児神話の影響が根強く、親が子どもの保育を担っていた方が子どもの育ちにはより良いといわれていたが、昨今では母親の就労支援という側面から、そのことはあまり強調されず、むしろ待機児童問題が社会問題化している。が、これは親の側の問題だけでなく、むしろ子どもにとって、幼少時期の保育・教育の充実が、家族以外の人々とも交わり、多くの経験をするためにより良いといえるだろう。だとすれば、現在は高校や高等教育機関の教育費の無償化や奨学金制度の充実などが検討されているが、むしろ幼少時の教育こそ、親の経済力などに関わらず、等しく受けられるようにすることが必要ではないだろうか。そして、その幼児教育の場において、様々なものに関心を向ける、好奇心を育てるということがアクティブ・ラーナーの育成により効果的なのではないだろうか。

Ⅳ 過度な干渉は学生の自由な発想力・独創力を奪う

アクティブ・ラーナーの育成のためには、様々な体験をさせ、好奇心を育てる必要があることは、すでに記したが、そのためにアクティブ・ラーニングはいかほどの効果があるのだろうか。特に大学においては、そもそも旧制中学の「デカンショ」の時代から、本人たちの興味のタイミングで語学を学び、哲学し、学友と酒を酌み交わしながら議論するという伝統があった。新制大学になってからも、ゼミの学友たちと多くの書物を読み、議論することが求められていた。

そこで教師の果たす役割としては、書物の紹介、議論の軌道修正役が求められており、教師はいわゆるファシリテーターとして存在していた。昨今のアクティブ・ラーニングの隆盛は、それらを広く多人数対象の講義科目にまで広げているということであろう。確かに多人数対象の講義科目において、教員の学説解釈が90分抑揚もなく語られることに対して、睡魔に襲われる学生も多々いるということであろう。また、昨今の反転学修などは学修効果が大きいと思われるが、本来の大学の授業はもともとそのようなものだったはずである。少なくとも文部科学省は90分の授業に対して90分の子習と90分の復習を課しているわけであるから、参考書を購入して読んだり、購入だけして大学生になった気分になったり、購入はせずに図書館で読んだり、さまざまであろうが、各自のペースで各自が自主的に学ぶことが要求されていたはずである。

現在、取り入れられているアクティブ・ラーニングの中には、教員の興味関心に基づいて組み立てられた課題をただひたすらに学生たちに作業をさせるだけのものもある。このような方法で行われるアクティブ・ラーニングはアクティブ・ラーナーを育てるのだろうか。自ら生涯学び続ける人材を育成するためには、自ら主体的に学ぶとする姿勢を育成する必要がある。しかしながら、現在行われているアクティブ・ラーニングの中にはそれとは逆の方向を向いているものもある。そして、それは必ずしも学生の主体的な意思とか意欲に基づいて行われているわけではないということである。

アクティブ・ラーニングと共に、あるいはその一環として、課題をたくさん課すということ

もある。確かにある程度の課題を課すことは重要であるし、学びをより効果的にするためには必要なことであると思われる。しかしこのことによっては、アクティブ・ラーナーは育つだろうか。いわゆる指示待ち人間を増殖させるだけではないだろうか。

学生の学びにアクティブ・ラーニングの名のもとに過度に介入することは、むしろ、学生の発想力・独創力を奪ってしまうことになりはしないだろうか。

V アクティブ・ラーナーを育てる アクティブ・ラーニングとは

アクティブ・ラーナーとは、能動的な学修者であるから、自ら課題を見つけて自ら学ぶ人のことであろう。一方アクティブ・ラーニングとは、能動的な学修法ということであろうが、現在使われているアクティブ・ラーニングの用法は、ただ単なる座学ではなく、学修者が行動している学修というような使われ方をしている。つまり、学修者がただ座っているのではなく、何かしら動いているようなイメージである。しかし、座っているだけであっても脳は動いているはずであるからいわゆる座学もアクティブ・ラーニングであるともいえる。またただ体を動かしているだけであって、能動的に動いているわけではなければ、アクティブ・ラーニングとはいえないようなものもある。勿論行動型学修として、取り入れられているフィールドワーク、インターンシップ、実習等に教育効果がないといっているわけではない。それらの学修経験をただたんに体験すればそれがアクティブ・ラー

ニングになるのか否かということである。また、知的能動性を動かすということで、座学であっても、いままでのような教員から一方通行の学びでないものをアクティブ・ラーニングと称している場合もある。例えば、反転学修やディベート、振り返りなどである。これらも学修効果としては期待大であるが、これらの全てがアクティブ・ラーナーを育てるアクティブ・ラーニングといえるのだろうか。これらの学修方法を用いていても、教員の指示に従ってただ単に作業をしているだけであって、アクティブ・ラーナーの育成にはつながらないであろう。

では、アクティブ・ラーナーを育てるアクティブ・ラーニングには何が必要なのだろうか。あるいはどういったアクティブ・ラーニングがアクティブ・ラーナーの育成を阻害するのだろうか。行動型学修については、ただ単に教室外に出ているだけであって、そのことが必ずしも学生の能動性にゆだねられているわけではないケースが多い。出かける先などとの交渉や企画段階から学生たちが積極的に関わっている場合であれば、能動性の育成に寄与できると思われるが、多くの場合は大学や教員が御膳だてしたところにただ単に出かけているだけのケースもある。さらに継続的に関わっていれば、その中から新たな発見や工夫も出てくると思われるが、単発に1.2回出かけるだけというようなものであるかうたがわしい。知的能動性を揺り動かすタイプのアクティブ・ラーニングであったとしても、教員の側から事細かに指示が飛びすぎると、かえって学生たちの能動性をそぐことになってしまう。

アクティブ・ラーニングをアクティブ・ラーナー養成にかなうものにするためには、学生たちの参画の機会をできるだけ広げ、教員の側があまり多くの手や指示を出さないことが大事だと思われる。教員の役割は、人間関係トレーニングのより良いファシリテーター像につながると思われるので、以下に人間関係トレーニングが、アクティブ・ラーナー養成のためのアクティブ・ラーニングになるための課題を整理する。

VI 人間関係トレーニングで アクティブ・ラーナーを育成する

人間関係トレーニングは、体験型の学修方法であり、自らの体験の中から新たな課題を見つけ、その課題を次に実践してみるということの繰り返しを基礎としており、さらにその学びの経験を日々の人間関係の中でとらえなおし、日々の人間関係の中で実践してみる、さらにその方法を会得することを目的としているので、確かにアクティブ・ラーニングであるとともに、アクティブ・ラーナーの養成も目指している方法であろう。そのために、フファシリテーターの過度な介入はいましめられている。

しかしながら人間関係トレーニングの個別の方法いかんでは、アクティブ・ラーナーの養成に寄与できる部分とそれを阻害する部分もある。さらに、アクティブ・ラーナーの育成という点からは好ましくない方法であったとしても、個別の学びこととしては必要であったりすることもある。そこで、アクティブ・ラーナーの養成という点から見たより良いトレーニング方法について具体的に検討したい。

トレーニングは多くの場合グループで行われる。そのグループ分けは教員がどの程度介入すべきか、それも学生たちの主体性に任せるべきかという問題がある。教員があまり介入しすぎることは、学生の主体性をそいでしまうので真みたいところであるが、学生たちに任せきってしまうと、結局毎回同じような顔ぶれになってしまい、学びの効果が薄れてしまう。昨年度の授業評価には、学生からそのような指摘もあったので、今年度前期はくじ引きを採用した。その結果今年度前期の授業評価では、学生たちの評価も良好であったので、今年度後期もくじ引きを採用することを伝えたところ、学生の中からくじ引き方法の改善提案がなされた。具体的には、毎回紙素材のものを教員が作るのではなく、棒状のもので繰り返し使える物を前もって作成しておけばいいという提案である。さっそくその案を採用し、割りばしの先にカラーテープをまいたものを用意し、試してみたところ、大変好評であった。このように、すべてを教員側が御膳だてするのではなく、すべてを学生に丸投げするのではなく、ある程度、教員側が仕掛ける必要はあるものの、どこかポイントポイントで学生たちの能動性を引き出していくということが大切であろう。

VII 効果的な振り返り学修の方法

人間関係トレーニングにおいて、もう一つ大事な作業が振り返りである。人間関係トレーニング以外の講義や他の授業においても、昨今は振り返りの重要性が指摘されている。ではその振り返りについて、アクティブ・ラーナーの養

成という点から考えた場合に、どのようなスタイルがよりよいのだろうか。

自由に感想等を書かせるというやり方であると、学生の自由度は増すものの、適当に行間を埋めただけというようなものも出てくる。人間関係トレーニングの場合であれば、ある程度、教員がそのワークから考えてほしいことを導けるような質問形式の方が、学生たちが新たな課題を発見しやすいであろう。

講義等でも、その日の授業やその日に配布された資料やその日にみたビデオ映像等について、最後にコメントや感想を書いて振り返りとしてあるものもあるが、この方法だと学生たちの学びは深まりにくい。それらを批判的に見る態度等を養成することによって、自ら考え、新たな学びに向かっていくことができるだろう。そのための工夫は重要である。具体的には、それらに対して共感した部分とその理由、あまり共感しなかった部分とその理由というように、ある程度質問を盛り込んだうえで、最後に自由に考えたことを記させるというような方法が考えられる。

また、振り返りをしただけで、そのフィードバックがなされないことが多い。丁寧にフィードバックを返している教員もいるにはいるが、多数講義であればあるほど物理的に難しい。そういう意味からも学びのサイズの検討も必要であろう。また、ティーチングアシスタントのサポートがあれば実施できることもあるだろうし、チューター制度の充実によってカバーできる点もあると思われる。しかしこれらはどちらも予算都合も関係してくることなので、教員の裁量ではなかなか簡単には取り入れられない。いず

れにしても、振り返りのフィードバックについて検討することが、アクティブ・ラーナー養成のための振り返り学修の要になるだろう。

Ⅷ ディベートでアクティブ・ラーナーを育成する

参加型学習のアクティブ・ラーニングの例として、ディベートが取り上げられることがある。確かに、ディベートは参加型のアクティブ・ラーニングであるが、では、ディベートでアクティブ・ラーナーを養成することができるのだろうか。ディベートでアクティブ・ラーナーを養成するならばどのような取組・工夫が必要なのだろう。

まず、テーマ設定について、学生たちに選択させるか否かという問題がある。自ら学ぶ姿勢という点だけで考えれば、当然学生たちの主体的な選択に任せた方がいいということになるだろう。しかし、それに偏りすぎてしまうとその科目でもともと議論したかったテーマから離れてしまうことも考えられる。従っていくつかの選択肢を示したうえで、その中から、選んでいくというような方法が良いだろう。

資料の収集についても、学生自身に調べさせるのは大事であるが、時間をかなり要してしまうので、時には教員側が最低限の新聞記事や論文等を用意するという方法もあるだろう。学生たち自身が集める場合には、お手軽なネット検索に頼るだけということのないようにという指導を先にすべきであろう。それらの指導のもと、自分たちで資料収集するという経験を繰り返して

いけば、生涯にわたって自ら学び続けるという姿勢にもつながっていくであろう。

ディベートは、ある程度型を覚える必要がある。型にはまったやり取りだけに終わってしまったのでは、能動性がそがれてしまうという心配はあるが、基礎的な学修をないがしろにしてしまったのでは、単なる言いたい放題のお話が上手で声大きい人の育成に終わってしまう。ディベートは、話すことがうまくなるだけでなく、聴くことも鍛えられ、それによってコミュニケーション能力を高めることができる。さらにコミュニケーション能力だけでなく、情報収集力や問題解決力の向上にも役立つ。それらの能力がまさにアクティブ・ラーナーにつながると思われるが、それらの能力の開発のためにも、はじめはある程度はディベートの基礎を学び、定型的なやり取りをおぼえこませることも必要であろう。

Ⅸ まとめ

アクティブ・ラーナーの育成のためには、単に学生たちに体を動かしてもらい体験をさせればよいというものではなく、また単純に振り返りをさせればよいというものでもなく、その体験を将来自ら主体的に学ぶことにつなげていくような工夫が大切であるということは再確認できたが、そのための具体例については、人間関係トレーニングやディベート等著者が日常的に取り入れている学修方法の検討にとどまった。今後アクティブ・ラーナーの育成のためのアクティブ・ラーニングを検証していくためには、

その他の方法についても広く検証していく必要があるだろう。

また、本論は、主に大学生に対する教育方法の検証であったが、先述したように、アクティブ・ラーナーの育成には大学生よりむしろ乳幼児期の若年層への働きかけが重要であると思われるので、アクティブ・ラーニングの方法論だけでなく、乳幼児期の保育・教育の保障をめぐる問題、たとえば、幼児教育の義務化もしくは無償化、あるいは家庭による文化資本の差の問題等、教育の方法をめぐる問題にとどまることなく、社会制度の問題であったり、経済格差の問題であったりというように、多角的な視野でアクティブ・ラーナーの養成を検討していく必要があると思う。

アクティブ・ラーニングの方法論については、そういう意味からすれば、アクティブ・ラーナー育成の議論の一部に過ぎないが、しかしながら、アクティブ・ラーニングがアクティブ・ラーナーの育成にとって逆効果になることがないように注意し、より効果的なラーニング方法を模索していくことは、今後重要な課題であり続けるだろう。特に、社会福祉士や教員など、直接的に人間を相手にし、チームワークでその人間関係のもとで仕事をしていく必要が大きい分野への入職を目指す学生の教育にとっては、アクティブ・ラーナー養成をよりイメージしたアクティブ・ラーニングがますます必要とされてくるだろう。著者も引き続き、アクティブ・ラーナーの養成にとってより効果的なアクティブ・ラーニングを実施していきたいと思う。

参考文献・引用文献

- 1) 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学～」2012年
- 2) CiNii <http://ci.nii.ac.jp/> 2016年9月20日最終閲覧
- 3) 県立広島大学AP事業推進部会 「平成26・27年度県立広島大学教育再生加速プログラム (AP)事業報告書」2016年